



白泉穂の
いまどき
恋愛
講座



先日、神戸市内のデパートで、あるショッピングな光景を目にして、私は、しばし立ち尽くしてしまいました。平日の夕刻で、店内に客の姿も少なく、静かで寂しい雰囲気さえ漂っていた。私は打ち合わせと打ち合わせの間にできた空白の時間を潰すために、これと言った目的もなく、ぶらぶらしていたのだ。そして何気なく、紳士服売り場へと足を運び、イタリアンブランドのコーナーに差しかけた時、私の目に、その光景は飛び込んできた。

一人の男と、一人の女。その二人の様子、醸し出している空気などを見た瞬間、私はまずドキリとして、それから2〜3秒釘付けになり、最後には思わず目を背けてしまったのだ。

男は若く、大学生くらいで、一方、女の方は、40歳を超えているように見えた。彼女は、身なりにお金をかけ、エステティックサロンで髪を磨き、隙のないメイクを施していた。そのことが、彼女を、逆に年齢以上に老けて見せているようなところがあった。

二人が親子でないのは、一目瞭然だった。それは、彼女の姿勢、目つき、発散している空気などを見れば明らかだった。彼女は、『彼を失いたくない』という切実な気持ちを隠そうとはしていないから。若い男に惚れこみ、引き裂かれんばかりの思いの中に身を投じていることを、無防備にも露呈し過ぎてしまっていたから。そのせいで、かえって男の方は、女に対してやや冷

酷な、シニカルな視線を送っているのだった。

二人はその時、ブティックで洋服を選んでいた。いや、男のために、女が選んであげている、と言った方が正しいかもしれない。二人からは、お金とベッドの匂いが発散されていた。

私はほんの2〜3秒のうちにそれらを悟り、苦々しい思いでその場を立ち去った。正直なところ、彼女を笑えないのだった。なぜなら私は、このコラムにさんざん書いてある通り、年下の男の子が大好きだし、30歳を迎えようとしている現在、ますますターゲットは低年齢化し、冗談まじりに友達には「男はハタチ以下でなくちゃ」などと言っているのだから。もちろん私は、先日のデパートで見た彼女ほど財力がある訳ではないので、美貌の少年を囲うことなどできずにいるけれど、それでもあの女性の気持が全然理解できないということはないし、私がこれからはますます若さを失い、彼女くらい年齢になった時、果たして財布の中がからっぽの状態、坊やたちを魅了することができなくなるかなどと、本気で考えたりしているのだから。

けれど、もし、万が一、私が仮に彼女のようにうんと年下の坊やと愛人関係を持ったとしても、私が救われる道は残っていると思う。それは、たとえ彼に完全に心を奪われていたとしても、そう彼に思わせないこと。彼を愛しているのだとは、微塵も彼に気づかせないこと。むしろ、気楽に情事を楽しみ、年下の坊やに洋服を買ってあげておごることをレジャーとして楽しんでいるのだと、自分を装うこと。つまり、あのデパートで見た女性のように、彼をすぐるような目で見たり、彼を失う予感に怯えていることを露呈してしまわないこと。

女がうんと年下の男に惚れこみ、そのことが悲劇だか喜劇だかになってしまいうのは、女の方があまりにも男に『執着』し、しかもそのことを隠そうともしないことなのだ。周囲の人々は女を軽蔑し、二人の関係に眉を潜め、その結果、彼までもが彼女を軽蔑し始める。洋服や時計や車と引き換えに、愛情を要求してくる女を、男たちは決して尊敬しはしないし、彼女たちの愛情をともしればただの欲望だと感じ、心の底では盛りのついた雌豚だと罵っていたりするかもしれないのだ。そして男が若ければ若いほど、女に対して残酷に振舞えることを忘れてはいけな

いと思う。だからもし、あなたが将来、遙かに年下の男に恋をしたとしたら、その時こそ強くなければならない。むしろ坊やたちを翻弄し、私があなたに本気になるとも思うの？という態度を取るべきだと思う。彼の方が、あなたに夢中になるように、仕向けるべきなのだ。そうでない限り、年上の女と若い男の情事は、女にとって悲惨なものになってしまう。

ただし、心の中は彼に対する熱い思いに駆られながらも、表面は冷たく振舞うというの、とても辛いことだ。恋に不馴れな婦人たちはそれができない。そして、私がデパートで見たような、目を背けたくなる光景が展開してしまうという訳だ。

【プロフィール】
1965年生まれ。同志社女子大学卒、株 電通ブックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「ありふれた無邪気が罪になる」(PHP研究所)、「キスまで待てない」(大和書房)など。

MARUOKA IZUHO

